

## 性格特性の5因子モデルにおける 協調性・勤勉性・経験への開放性因子の併存的妥当性

谷 伊 織

### 問題と目的

性格特性の5因子モデル (Five-Factor model; FFM) は近年急速に勢力を伸ばし、多くの支持を得るものとなった。このモデルはパーソナリティを包括的に理解する上で非常に便利かつ明快なものであると言われており、様々な領域の研究で用いられている。しかし、その一方でこのモデルに関しての欠点が述べられることもしばしば見うけられる。実際、このモデルはその存在基盤が脆弱であるといわれる。また、因子数については見解の一致が見られても、その名称や本質についてはまだ十分な共通の理解が存在していないというのが現状であり、研究者間で同じ因子が別の呼称で呼ばれることも少なくない。これを理由に各因子の構成概念妥当性に疑問を示すものもある。本研究においてはこのような5因子モデルの問題を解決すべく、5因子モデルの中でも特に概念が不明確であると思われる協調性因子・勤勉性因子・経験への開放性因子の妥当性の検討を行うことを目的とする。以下に、これらの各因子について、先行研究から予想される因子の本質について述べる。

**協調性因子** この因子は他者との関係において暖かく受容的で、協力的か、あるいは逆に冷たく拒否的で非協力的かというパーソナリティ次元を表していると考えられており、この特性が高いと愛他的・向社会的行動を生じやすく、逆にこの特性が低いと反社会的行動を生じやすいと考えられている。しかし、協調性因子は本当に向社会的行動や愛他的行動には結びつく傾向なのかどうかは疑問が残る。日本において温和・寛大な人間と評される人間は、積極的に向社会的行動を行うような人間よりもむしろ、どんな状況でも怒らないような人間であるように思われる。この因子は対人関係における葛藤に対する対処方法との関連が指摘されることもあり、日本における協調性はむしろこのような行動にその本質が表れるのではないかと考えられる。協調性が高いことで、妥協したり、交渉したり、問題を曖昧にして衝突を避ける行動が現れるが、その際にストレスを感じるかどうか、そしてそれを処理できるかどうかは協調性とは関係がなく、神経症傾向や外向性と関係があると考えられる。また、協調性をパーソナリティの次元とは捉えず、社会的望ましさの虚構物 (Artifact) と捉えるものもある。本研究においては社会的望ましさと協調性の関係についても同様に検討を行

う。

**勤勉性因子** この因子は「勤勉-怠惰」の因子と考えられており、社会において環境を理解や予測が可能で秩序あるものにコントロールしていこうとする傾向や、あるいは秩序や統制間の喪失を恐れる傾向として現れると解釈されている。仕事に関わる因子、という見解が一般的である。しかし、「勤勉-怠惰」というが、怠惰も職業や役割に応じて、時間を守れない人間が怠惰であったり、仕事をきっちりこなせない人間が怠惰であったりする。2つの「怠惰」は別のものではないだろうか。また、環境を秩序あるものにコントロールする傾向と、秩序や統制感の喪失を恐れる傾向は共に完全主義傾向といえることができるが、この2つは5因子においてはそれぞれ別の因子として解釈できる。すなわち、環境をコントロールし、完全であることを望む傾向は勤勉性の傾向であるが、失敗を恐れたり、自分が取っている行動や態度について不安に感じたりする傾向は神経症傾向の持つ特徴であろう。仕事に関する因子である、ということ的前提にして考えたとしても、時間・課題の遂行についての行動傾向として2つの観点から勤勉性という傾向について考える必要があるだろうし、また課題の遂行についても、ただ完全であることを望むのか、あるいは完全でないことや失敗を恐れる傾向であるのかを明らかにする必要がある。

**経験への開放性因子** この因子は5因子の中でも最も命名、解釈に違いの多い因子であり、知的、理性的傾向や、空想的、芸術的特徴、好奇心の強さや反伝統的、自由主義傾向などを表す因子だと考えられている。中でも柔軟で開放的な認知スタイルであるという見解が有力である。認知欲求、曖昧さへの耐性という視点からこのことについて検討する。また、外界からの影響を受けやすいことから、気分が変わりやすくなることも経験への開放性因子の大きな特徴といえる。一般的に、気分や情緒の安定性は神経症傾向や外向性の持つ特徴と考えられがちであり、神経症傾向はしばしば情緒不安定性などと呼ばれている。これまで、5因子と様々な特性との対応を明らかにしてきた研究においては、ある特性のレベルとの関係を注目してきたが、安定性との関係を捉えることこそが経験への開放性の特徴を捉える上で有効なアプローチではないだろうか。本研究では、自尊心や気分の安定

性が5因子とどのように関係するかを調べ、経験への開放性との関わりを調べた上で、この因子についての検討を行う。

#### 方法

質問紙による調査を行った。質問紙の構成、調査対象者、調査時期、実施方法といった詳細について下記に示す。

**質問紙の構成** 「性格に関するアンケート調査」Big Five尺度(和田, 1996), 対人葛藤方略尺度(加藤, 2003), Balanced Inventory of Social Desirability (Paulhus, 1986), 対人恐怖心性尺度(堀井・小川, 1996; 1997), 向社会的行動尺度(菊池, 1988), 援助規範意識尺度(箱井・高木, 1987) 「性格に関するアンケート調査(2)」社会的望ましき尺度(北村・鈴木, 1986), 自己志向の完全主義尺度(桜井・大谷, 1997), 達成動機尺度(堀野, 1987), Locus of Control 尺度(鎌原・樋口・清水, 1982), 遅延傾向尺度(宮元, 1997), 心理的健康と関連する曖昧さ耐性尺度(増田, 1994; 1998) 「性格と気分の変化に関するアンケート調査」多面的感情状態尺度(寺崎・岸本・古賀, 1992), 自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982), 記入時刻, 一日の主な出来事, その評価(月日と時間, 自由記述, 5件法), セルフ・モニタリング尺度(岩淵・田中・中里, 1982), 認知欲求尺度(神山・藤原, 1991)

**調査対象者** 質問紙は6大学の計14講義で2回に渡って配布・回収され、639名の回答を得た。授業を欠席するなどの理由から、「性格に関するアンケート調査」にのみ回答、「性格に関するアンケート調査(2)」にのみ回答したデータが234名あり、この234名を除いた405名を分析の対象とした。

**調査期間** 2003年10月下旬から12月下旬にかけて行われた。

**実施方法** 調査は2度の講義に行われた。第1回目の調査が講義の終了時に一斉に行われ、「性格に関するアンケート調査」が配布、実施、回収された。そして第1回目の調査の終了時に、その後の調査を行うための小冊子「性格と気分の変化に関するアンケート調査」が配布され、被調査者はその日の夜から1週間にわたって毎晩就寝前に記入することが求められた。さらに、翌週の講義において第2回目の調査を行うことが伝えられ、その終了時にこの冊子を回収することが伝えられた。第2回目の調査は翌週の講義の終了時に行われた。「性格に関するアンケート調査(2)」が行われ、配布、実施、回収がなされた。被調査者の照合はフェイスシートの項目から行われた。

#### 結果と考察

Big Five尺度については和田(1996)と同様の因子構造を得ることができた。他の各尺度についても作成者とはほぼ同様の因子構造が見られ、信頼性について $\alpha$ 係数を算出したところ、ほとんどの尺度において十分に高く、尺度については特に問題がないと考えられた。そこで、Big Five尺度とについて相関係数を求め、その結果から各因子についての検討を行った。

**協調性因子について** 対人関係のありかた、向社会的行動との関係、さらに社会的望ましきとの関係の3つの観点から協調性因子について検討した結果をまとめると次のようになる。協調性因子は対人関係のあり方と強い関係のある因子であると考えられるが、協調性因子は自ら積極的に人に対して何らかの働きかけを行ったり、関わりを持ったりしようとする因子ではなく、むしろ消極的、受動的な特徴を持っており、積極的に人に対して何らかの働きかけを行う傾向は外向性の特徴であると考えられる。したがって、向社会的行動のような行動に直接結びつかない。協調性の対人関係における特徴は、対人関係においてトラブルや軋轢が生じることを避けようとする傾向である。したがって、なんらかの対人葛藤が生じた際にはお互いにとって利益になる解決を目指したり、妥協したりしてトラブルを避けようとする傾向が強く、自己が譲歩することも厭わない。援助規範尺度の下位尺度である自己犠牲規範意識との相関が強いこともこれを支持する。他者との安定した良好な関係を望み、築くための因子であるといえよう。したがって、対人恐怖などには結びつかないという点では神経症傾向と異なる。他者との良好な関係を望むことと関連して、他者に対して良い印象を与えようとする傾向も見られ、それが社会的望ましきとの強い関係として表れていると考えられた。しかしそのことについても、積極的に自らを良く見せようアピールする行動傾向があるわけではなく、そのような行動傾向は外向性と関係があることが示された。

**勤勉性因子について** 仕事を対する完成度の志向、時間の怠惰傾向、動機づけ、自己に対する統制という4つの観点から勤勉性について検討した結果をまとめると次のようになる。勤勉性は仕事に関わる因子ではあり、より完成度の高い仕事をより早く行おうとする傾向である。しかしこのような傾向はものごとを完全にやり遂げようとする達成動機に基づいたものではなく、むしろ仕事を常に自分で理解、コントロールできる状況にするために見られる傾向である。つまり、社会において環境を思い通りにコントロールしていこうとする傾向ということが出来る。しかし、秩序や統制感の喪失を恐れる傾向ではなく、そのような恐れや不安を抱く傾向は神経症傾向と

関わりの深い傾向である。

経験への開放性因子について 知的好奇心、動機づけ、外界への変化に対する敏感さという3つの観点から経験への開放性について検討した結果をまとめると次のようになる。経験への開放性は柔軟で開放的な認知スタイルを表す因子であり、これが高い人は、知的好奇心や認知欲求、さらには自己充實的達成動機が高く、外界の変化に対して敏感であり、感受性が豊かである傾向があると考えられる。しかし、知的好奇心や認知欲求、自己充實的達成動機が高いとはいっても、何か分からないことがある状況に対して耐性がないというわけではなく、そのような状況に耐えられなかったり、不安を感じたりするのは神経症傾向と関わりの深い傾向であると言えよう。また、外界の変化に対して敏感であり、感受性が豊かであると言っても、自尊感情の安定性にまでは影響を及ぼすことはなく、自尊感情の不安定性は神経症傾向との関係が強いことが示唆された。

#### 総合的考察

本研究の目的とした協調性因子・勤勉性因子・経験への開放性因子の併存的妥当性は十分に示し、この3因子について、より明確な解釈をする事が出来たと思われる。しかし、Big Five尺度の経験への開放性と外向性の因子間相関が非常に高く、この2因子について十分な弁別妥当性を示すことができたとは言い難い。これはBig Five尺度の抱える問題であるのか、サンプルに問題があるのか、あるいは他の概念との関係からこの2因子について捉え直す必要があるなど、様々な可能性を考慮する必要がある。また、Big Five尺度以外に用いた尺度間での相関についても十分に検討する必要があると考えられた。今後は上記のような問題を考慮した上で、性格特性の5因子モデルについて妥当性の検討が行われることが期待される。